

# SRID NEWSLETTER

No. 327 FEBRUARY 2003 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎  
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

## 2月号

スワジランド国における王権社会  
身近なコミュニティ開発

国際航業株式会社海外事業部 升村章司  
国際協力事業団 アジア第一部 本田恵理

## お知らせ

1. 冬季シンポジウム 2月22日(土) 一ツ橋大学大学院 学術総合センター
2. 懇談会 2月28日(金) 18:30~20:30頃  
講師: 福永 喜朋 (ふくなが・よしとも) 氏  
テーマ: 「モザンビークから帰って」  
場所: J B I C 開発金融研究所内 大会議室
3. 幹事会 3月4日(火) FASIDにて 午後6時30分から
4. 退会 河合 三良さん

## スワジランド国における王権社会

国際航業株式会社 海外事業部 升村章司

私は昨年から J I C A のコンサルタントとしてスワジランド国の土壌保全にかかわる調査に従事しておりますので、スワジランドのことを少しお話してみたいと思います。

スワジランド王国は南ア共和国とモザンビークにはさまれた人口 100 万人ほどの小国です。ボーア人からの領土併合の脅威を防ぐため、1846 年にイギリスの保護領となり、1968 年に独立を果たしました。イギリスの保護領の時代には白人が多く入植していたようですが、現在は白人が所有していた土地 (3分の2) の半分はスワジ人に買い戻され、白人の土地所有は 30% 程度となっています。

この国は世界的にもほとんど知られていない国の一つではないかと思いますが昨年 10 月下旬にある事件が発生し、CNN などメディアに登場したことがありました。ご記憶の

方もおられるかも知れませんが、スワジランドの現国王（ムスワティ 3 世）が側近に命じて女子高校生 3 名を「拉致」して私邸に軟禁した、というかなりショッキングな事件でした。

実は国王による未婚女性の「拉致」は今までも行われていたようですが、表面化したのはおそらく今回が初めてのケースと思われます。表面化した原因は、拉致された娘（ゼナさん）の母親が裁判所に訴え、王室に対し娘の返還を要求したことにあります。王室に対してこのような訴えを行うことは前代未聞の出来事であつたらしく、政府上層部もかなりあわてた様子が新聞報道から窺えました。司法長官が裁判を担当する判事に対し、裁判を続行した場合には裁判官を罷免する、という書簡を出していたことが暴露され、マスコミから叩かれる、といった一幕もありました。

最終的には母親が返還を要求していたゼナさんは、国王との結婚を本人が承諾し、10 人目のお后候補として王室の行事に参加するようになったことが報道されました。ゼナさんは拉致された直後に 18 歳の誕生日を迎え、「めでたく」成人となり、自分の判断で結婚ができる年齢に達したわけです。ただし、あとの二人の女性のことは所在不明となっています。

上記のような出来事に対して大多数の方々は、「スワジランドというのはなんと前近代的な遅れた国だろう」と考えるでしょうが、実はこの国の一人当たり所得はアフリカ諸国の中でも上位クラス（約 1,300 ドル）で道路、電力などの基礎インフラもよく整備されており、村の生活も豊かとは言えないまでも、草葺の家はほとんどなく、アフリカ諸国の中ではかなり高い水準の生活レベルにあります。

この国の特徴は、慣習法にもとづく古い王政と近代法（憲法）にもとづく民主的な政治体制が混在していることですが、実権は国王にあるため、議会での議決事項に対して国王は拒否できる権限を持っています。ただし、すべての決定は国王自身が行うわけではなく、枢密院のごとき諮問機関があり、そこでの決定が最終結論とされています。また、面白いことにその最終結論に対する救済システムもあり、国王（枢密院）の決定に不服な場合は皇太后に決済を仰ぐという方法も準備されています。

慣習法にもとづいて土地は国王のものとされ、その土地の管理は各地のチーフと呼ばれる地方首長に委託され、家長を代表とする住民に配分されています。およそ 200 名のチーフ（首長）を中心として土地の管理を通じた地域社会をコントロールする仕組みができています。

私自身としてはこのような古い体制がいまだに残っていることに対しては非常に興味を抱いているわけですが、実際問題として、このような古い体制をいつまで継続できるのかという点に関しては疑問を抱いています。

新旧体制をいかに融合させるかという王室側の努力もなされていますが、一方では、古い王政を廃止しなければスワジランドは近代化できない、という考えのグループもあり、その対立は深く静かに潜行しているように感じられます。

紙面の都合で今回はあまり詳しいことは述べられませんでした。いずれ機会があればスワジランドの王権社会についてまたお知らせしたいと考えております。

## 身近なコミュニティ開発

国際協力事業団アジア第一部 本田恵理

私は、台東区谷中というところに住んでいます。たくさんのお寺の門前町としての歴史を持ち、古きよき江戸の面影を残す町です。路地には鉢植えが並び、お年寄りがひなたぼっこ。駄菓子屋に駆け込む子供たち。昔ながらの和菓子屋、煎餅屋。徳川慶喜を始め多くの著名人が眠る谷中の墓地。そんな町が好きになって住み始めて、足掛け10年以上になります。

今のマンションに越してきたのは、約2年前です。このマンション、最近各地で問題になっている、いわゆるマンション紛争の果てに建設されたマンションでした。お寺が並ぶ坂の途中にいきなり高層マンションが建設されては、景観が破壊されるということで、地元の反対運動が起きたのです。この運動の特徴は、単なる建設反対の運動ではなく、谷中の町並みに合ったマンション建設の提案だったということです。マンション建設業社もこれに理解を示し、両者の協議の内容は、建物の規模からデザイン、さらに地区レベルでの建築協定締結にまで発展しました。私がマンションに入ることを決めたときには、問題は一応片付いており、このような経緯はあとから知った次第でした。

こうしてようやく建設されたマンションでしたから、地元の方たちは、「マンションにはどんな人たちが住むのだろう」と、期待と不安の入り混じった気持ちでおられたのだろうと思います。マンション建設までが第1ラウンドだとすれば、第2ラウンドは私たちが入居してから始まりました。

この辺りは、お祭り、運動会、火の用心、餅つき大会など、地元の行事が多いところで、お祭りにしても、タコ焼き、焼き鳥、焼きそば、綿菓子などの屋台一式を町会で所有していて、いわゆるテキヤが屋台を出すのではない、地元の人々による手作りのお祭りをしています。とても素敵なことなのですが、主催する側はたいへんです。何もかも初体験のマンション住民もお手伝いに駆り出されるのですが、タコ焼きひとつ焼くにも、地元には地元のお作法ができてあがっていて、これを理解するには時間がかかります。町会で集まっても、前からの地元の人たちとマンションの人たちとの間には、なんとなく見えない線が引かれているような感じがあります。ほんとうの意味でのお仲間になるには、もうしばらく時間が必要だなあと感じます。マンションの住民たちは、谷中が好きでこのマンションを選んだ人がほとんどなので、お互い仲良しなのですが、みんなで、「いつか、マンションという名の長屋になったらいいね」と話しています。

さて、ここで、はたと、「これってどこかで聞いたことがある話みたい」と思われませんでしたか。そう、援助プロジェクトにおいて、最近ますます重視されてきているコミュニティ開発や社会配慮。地元住民と事業者とが協議を進めるに当たっては、専門的知見を持った地元の町づくりのNPO「谷中学校」が、大きな役割を果たしました。これって、ファシリテーター？ 協議に際し、地元住民が、不特定多数の周辺住民ということではなく、お寺の代表や町会の代表などから成る委員会をきちんと組織したことも見逃せません。これは、組織化ですね。特定のマンションの問題にとどまらず、地区の建築協定にまで発展したというのは、インスティテューショナルライゼーションでしょうか。地元住民とマンション住民との融和は、住民移転を伴うプロジェクトにおいて、いつも問題になることです。

なーんだ、国や人種が違っても人間っておんなじなんだ、というごく当たり前のことを、自分の生活の中で身をもって体験しているところです。普段、プロジェクト・ドキュメントやコンサルタントの仕様書に書いていることが、現実の問題として、まさに自分の目の前にあるわけです。自分ができないことを人にやれとは言えないよなー、ちょっと疲れていても面倒くさくても、自分の生活の足元をきちんと固めていかないといけないなーと、仕事人間になってしまいがちな自分の生活のあり方を見直すきっかけになっています。